

CSセミナー2018年 午後の部

日時:2018年5月19日(土)

会場:大阪クリスチャンセンター

講師:大嶋 重徳 牧師(キリスト者学生会(KGK)総主事)

午後の部 『子どもたちに届く説教ー説教までの「途上」の形成と説教作成ー』

はじめに こどもたちが生きている時代

私の2人の子どもは、とても辛口です。2人がある教会のキャンプに参加して、「くそほどおもんなかった」と言って帰ってきました。彼らが言うには「あの講師は、中高生のために祈っていないよね。持ちネタをもってきている」と言ってくる。その言葉が自分に言っているようでつきさります。

I コリント9章 22 節

『弱い人に対しては、弱い人のようになりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。』

パウロの手紙は、パウロが生きた時代ならではの言葉がつかわれています。例えば経済用語だったり法廷用語がつかわれたり、手紙の読み手がどう受け取るかを想像しながら言葉が選ばれ、もちいられています。聖書は変わることなく真理です。しかし福音が語られている対象に向かって適用され、聞き手が聞き取りやすい言葉、わかる言葉。これが私達説教者にもとめられていることです。

「成長」にかいてあることを言うておけばセーフというものではない。それは私の教会のあの子どもたちにわかることばなのか。「わかる言葉」とは、一般化したものではありません。「私達の教会のあの子ども」に伝わる言葉を手にしていく必要があるのです。

1. 説教までの「途上」と「届く言葉」の形成を目指して～エマオ途上のキリストから～

ルカによる福音書24章 13 節～32 節

ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから60スタディオン離れた エマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在しながら、この数日そこで起こったことを、あなただけはご存じなかったのですか。」イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放して下さると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。仲間の者が何人か墓へ行ってみましたが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」そして、モーセとすべての預言者から始め

て、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。

①説教までの「途上」を形成する人格的な交わり

2人の弟子は、イエスの復活を耳にしながらかエルサレムから離れていきました。かれらはキリストの弟子であることをやめようとしていた。彼らはイエスを神の子と言わず、「ナザレのイエス」、「預言者」と呼びました。その言葉には失望が表れています。彼らにとって復活は他人事でした。彼らの目は見えなくなっていたのです。

このような若者、小中高生の姿はよく見かける光景です。親に教会につれてこられた。しかしいまや、神がいるかどうかわからない。熱心な親が、神はいると言っている。そして教会に行くことより自分のやりたいことをしっかり握っている。だからいくら説教でイエス様が差し出されていても、見ながらにして見えない。説教を聞きながら、きこえていない。

イエスはそんな彼らに、イエス様があらわれていきなり説教をはじめたかということ、そうではありませんでした。そんなイエス様のあらわれ方は、私達と教会学校の子も達との位置を教えられる。

イエスがなさったのは、エルサレムから、自分の復活から離れていこうとする二人と向きを一緒に向いてくださって、一緒に歩かれたことです。これが、教会学校の教師が、教会から離れていこうとする若者達に対する位置取りでしょう。

もちろんイエス様は不信仰を妥協にしたのでも、罪をあいまいにしたのでもありません。このあと聖書全体から福音をまっすぐに解き明かされる。

しかし、いきなり彼らの姿を否定することなく、「一緒の方向を歩く」という仕方で、彼らと出会ってくださった。

②説教前に形成する若本たちとの信頼 共に歩く、共に過ごす、共に食べる

・彼らのそのままの言葉を聞く「どんなことですか？」

ではそれはどんなふうに行く歩き方なのか。となりに位置しながら彼らに尋ねられた「歩きながらやりとりしているその話は何のことですか」、と聞かれた。

彼らの話に興味をもった。若者と共に、中高生と共にあるために必要なのは、彼らに関心を持ち、彼らに関心をもつものに関心をもつということです。

・怒らず、裁かず、評価せずに

すると2人の弟子は、「えっ、知らないの？」と少し見下してイエスに言っている。復活されたイエス本人にむかって、上から目線で話している。そんな2人の態度に対して、イエスは怒ることもなく「それはどんなことですか」とさらにきかれる。

私達は子ども達から「ええー、そんなことも知らないの」と言われると、「ああ、わるいんかよ」と腹がたったり、彼らと話が合わない、歳をとっちゃったんだ、もう声をかけるのはやめようと、恥ずかし

い思いができて、だんだん子ども達にはなしかけるのが、おっくになり、やめようという気持ちになっていく。

しかし、神が人となられたイエス様は、ここで若い2人から、ばかにされることなんか、恥をかかされることなんか、この後、福音を伝えることのためにはいくらでも引き受けられる。

説教者は、彼らの関心を尋ねるといのは大切なことです。今の時代の関心事は多岐にわたる。「小学生はこれ」といった一般化されたものはない。私は、彼らにできるだけ関心事をきく。今、どんな漫画よんでんの。どんな雑誌よんでんの。「あー、あれね」。わかっていないですよ。すぐにグーグルです。だいたい、「いいよね」というわけです。時に、「えっ」と教会の文化からするとどうかなと思うものであったとしても、「いいよね」「あれ、かわいいよね」。彼らの読んでいる雑誌、漫画、小説、よく見ているサイト、歌手。それらに共感はしないですよ。しかし理解しようところみる。

これは、やがて言葉を語っていくときの、彼らに届く言葉を手に入手するための、非常に重要なことですし、そして一方で彼らがどのあたり罪の戸口のそばにいるのかを知るためにも、彼らが見ているもの、読んでいるものにきちんと関心を払っていく。

すると彼らは、彼らの暗い顔をしている理由を話しはじめていくわけです。イエス様に対して望みをかけていました、と本人に向かって言うわけです。そして他人事のように復活を語る。イエス様に対して、いくつもの失礼な言葉をつづけます。しかしイエス様は、ここで一度も言葉をさえずらず、評価せず、彼らの言葉をじっときいてらっしゃる。

私達は、子ども達や青年たちが話しはじめると、すぐにどう答えようかと、その評価が表情に出始めるということがある。「そういうことを教会が言っているわけではない」とかね。彼らの理解がたとえ間違っていようと、彼らがどう聞いたのか、どう考えたのか、そのことばどおりにちゃんと聞いてあげる。そのことはとても大切なことです。それはやがて、こちらの言葉をちゃんと聞いてくれる信頼関係。説教をきちんときく。彼らが聞こうと思う前提にもなるからです。

先日、埼玉のある大きな教会で、礼拝の説教に呼んでいただいて、午後に青年たちの学びのリードをしてくださいと依頼があったんですね。

そこで牧師に依頼されたのは、「ここがいやだよ、うちの教会」というテーマ。牧師も牧師夫人も一緒にでてくれてね。そしたらその青年たちが「うちの教会は、親が厳しすぎる」とか、「実は教会員の間で正直に話しをしていない」とか、「実はあの人とあの方は仲が悪い」とか。「教会ではいい子の仮面をかぶってしまう」。さらに、「説教が自分に語られているとはとうてい思えない」いっさい大人を配慮しない言葉が飛び交ったのです。しかし牧師は、表情をかたくせず、「そうだよなあ。俺も知っている。あそこ仲わるいよなあ」なんていいながら、「分かるー」と言いながらこの時間を過ごしてくれたんです。

そしてそのまま終わらずに「ここが好きだよ、うちの教会」というお題で話しました。そしたら「教会ではほんとの自分でいられる」という言葉がでてきました。「ええ、教会では本当の自分じゃないのに私は」とかいいあいながら。「説教は時々わからないけど、あの牧師のキャラだけは好き」「同じ教会で育った仲間がいること」「クリスチャン2世の苦しみを分かちあられる人たち多いこと」。

さらに「もっとこうしたら良くなるのに、うちの教会」というお題にうつると「ゲームばかりやっているあの子どもたちがかわいそう」とか。「誰かがもっと遊んであげたほうがいいとか」「離れてしまったあの子達とライングループをつくってみようと思う」

最後に今日どうだったという感想を言い合うと、「あいつが、あんな教会に対して本気だとは思っていなかった。びっくりしました。こんどおまえ役員やれよ」みたいな。色々話し合ったわけですね。

そして嬉しかったことは、「教会でこそ本当の自分でいられる」と言った彼女に向かって、「本当の自分でいられない」と言ったこの子はほとんど教会に来なかったんですけど、ずっとそれから教会に来続けるようになったとか、子ども達のためにサッカーを教えはじめの大学生のお兄さんたちが出てきたとか、そんなことを後から牧師が話してくれました。

・同じよりを歩き、同じ時間を過ごす、止まる

じゃあ、そんな彼らに「話して」と言ったところですぐに話せる関係があるわけじゃない。「どうせそれ聞いたところで、なんかさせるつもりでしょ」

つまり自由に話せるという空気は、それを形成する時間というものが必要になるわけです。

イエス様が途上でなされたのは、彼らと一緒に同じ時間、同じ距離を歩かれたということです。

若者たちと一緒に時間を過ごすことなく、子ども達の心の暗闇を話してくれるというような人格的な交わりや、あるいは届く説教の言葉の形成はできないんです。

29 節 2人が、「一緒にお泊まりください。」

イエス様は泊まって話そうという彼らのリクエストに応えられたんです。

クリスチャンキャンプの良いところは、礼拝やプログラム優先のイベントの時間ではできないことができるんです。数十時間を共にして、彼らの本音の言葉で、次の予定がないところで、彼らと話ができる。で、私達大人も全力でそのキャンプのプログラムで遊ぶということをやらなきゃいけない。子ども達とどれだけ遊べるか。私は色々な中高生キャンプに呼ばれていきますけど、最初の遊びのウエルカム時間とかは全力で遊ぶと決めています。「先生はお部屋に入ってお休みください」みたいに色々言っていただきますけど、そこでちゃんと遊ぶ、そして名前を覚える。このキャンプの中では、誰をいじれば全員で笑えるかというのをジーンと見ているわけです。そして説教では覚えた名前を呼びながらその説教を進めていくわけです。夜は夜で教会のメンバーで集まっている男の子達の部屋に入っていて、彼らの恋愛とか結婚とか性とか、そういうテーマでシェアしあえる。で、自分の考えもきっちり伝える。そういう時間をもつ講師は、キャンプで子ども達はほんとによく話しを聞いてくれる。

若者宣教の成果は、かけた時間に比例するというのが私の確信です。どれだけお洒落でセンスが良くても、そんなチームが来て助けてくれても、そのチームが帰った後も私達は、そのメンバーと一緒にやっていかななくてははいけない。むしろどれだけダサかったとしても、一緒に過ごした時間というのは、やはりかけがえの無い信頼関係を作っていく。

エマオ途上の2人は安心して、イエスに話すことができた。イエス様は、彼らの暗い顔をしている理由を聞きだすことができる、そのやり方。これがやがて、失望と悲しみを話す相手がイエス様だと気づくとき、これはそのまま祈りへと変わっていく。

・食べる

さて、イエス様がそのあとなされたのは、食卓を囲むということです。キリスト教信仰において食卓を囲むのは非常に霊的なことです。イエスは裏切った弟子達のために、朝ごはんの準備もされました。裏切った弟子達にとって、自分は裏切ってしまったことを、なんて申し開きしたらよいか、

なんておこられるんだろうか。もうあわせる顔がない。そういう時にイエス様は「ごはんできているよ」とおっしゃってくださった。ご飯と一緒に食べるというのは、赦されているという関係なんです。久しぶりに来た青年に、「うちでご飯たべていく」と声かけられる。こっちは心苦しいわけです。ずいぶん教会に来ていない。でも、そのように声をかけられると、「ああ、ゆるされているんだな」と思える。「食べる」という行為は非常に重要なことです。食べて、一緒にいて、話して、バイブルスタディをする。これは永遠に続くアプローチだと思います。

2. 「届く言葉」の形成

①確信を持った神の言葉の語りと、時代に「届く言葉」

②「ああ物分りの悪く、心が鈍い」という表現 通常の説教において用いない表現を用いて。

「ああ物分りの悪く、心が鈍い」これは非常に厳しいことばです。「アホやなー」からはじまったんです。説教のオープニングとしてはなかなか無い言葉。はっとする非常に刺激的な言葉。でもこの厳しい言葉を聞いても、彼らは受け止められるだけの十分な時間をイエス様とすごしていた。もうすでに福音が語られる素性は形成されていた。その時イエス様は、ためらることなく福音をはっきり語り始められた。

サマリヤの女との出来事もそうです。「水を下さい」。最初は、一緒にお茶しよう、だった。そしてある局面に来た時、「あなたの夫をつれてきなさい」。これは彼女の罪の問題だった。そこをためらうことなく語ったのも、プロセス、関係作りをイエス様はちゃんとなさっていた。

私達の教会学校の説教は、そのような関係性を築かれた上で語られている言葉なのか。それはよく考えなくてはいけない。届かない。それは生徒がわるいのか。彼らと一緒に時間を過ごしていくとき、子ども達が、「この人のこの言葉を聞かないといけない」と思えるだけの関係作りがそこにあるのか。

③言い当てる「預言者の言った全てを信じられない」

説教者が、十分に関係をもったにもかかわらず、罪を語らない、それは彼らの心に届かない。最近、問題だなあと私が思っているのは「ありのままのあなたが素晴らしいブーム」です。「愛されているよ、価値があるよ」。罪を語らないわけです。しかし、ある程度小学校高学年になったらわかるわけです。ありのままの私は罪人だと。そのことをはっきりと言えない大人の説教者は、「ああ、この人は私のことをわかっていない」と思われる。問題は律法主義的に語ることです。この罪のゆるしと十字架の喜びを、私達は福音理解としてちゃんとしているかということです。

「ああ愚かな」。はっきりとイエス様は、彼らの問題が何かと言うことを言いぬかれたわけです。「あほやなあ」というのはなかなかない言葉。でも若者達がはっとする表現。え、牧師がそう来るみたい。子ども達の顔があがる入り方。通常は使わない言葉を用いて、彼らの心にとどけていく。「心がにぶい」それは、「預言者の言ったことが全て信じられない」という問題そのものをずばり言い当てられた。厳しい表現にもかかわらず、彼らが聞くことができなものは、自分を言い当てられたという経験なんです。

まさに私達教会の教師は、子ども達のおかれている状況、心理描写を言い当てる必要があるのです。ああこの先生は私のことをわかっている。私のことを言ったって。何でわかったんだろう。みなさんもあるでしょ。

私も呼ばれて説教をしたとき、「先生、私のこと、うちの先生から聞いているですか」。そんなん聞いていたら逆に語れませんよ。そういうことがあるんですよ。説教で私のことを言い当てられる。こどもた

ちは自分のことを言い当てられるという体験を説教中にしなければならぬ。それは、先生が私のことを知っているということではなく、聖書が私を知っているからなんだ、という聖書体験になるわけです。これは神様が私のことをご存知だからだ。この神体験になっていくわけです。つまり私達のCSの説教は、子ども達を言い当てることが必要なわけです。

若者に届くことばは、聖書に結びついていく必要がある。時々、若者と関係作りだけ非常にうまいという先生がいる。しかしやがてその先生が教会から離れていったら、子ども達が教会に来ないということがおこる。

私達CS教師が願うことは聖書につながる事なんです。教師につながることを超えて、聖書につながっていく。

3. 若者に届く言葉を目指して

①自分自身の体験から

・はじめての説教経験

私が生まれて初めて説教したのは高校1年生の時。私のいた教会が無牧になって役員達が順番に説教をしていた。そのため説教訓練会というものをやっていた。私は高校1年生のとき、洗礼をうけてちょっと燃えていたんです。だから説教訓練会にもでていたんです。なんであんなのを選んだのか、イザヤ書だったんです。役員さんのまえで、「しげちゃん、すげーなー」と言われて、こんど中学生科でやってと言われて、「ああ、いいすつよ」って。そしてやったんですけど、そこにうちの妹がいたんです。終わった後に、「お兄ちゃんの話は何をいっているのかさっぱりわからん」。これは説教者人生としてすごく幸せなスタートだったと思います。自分がどれだけ恵まれ、教えられ、感動していたとしても、自分の話はわかりにくいんだという、この決定的な自分への理解が、そこにあったからです。

・勢いとフィーリングの近さで

さらに大学卒業後、私はKKGKの主事になるんです。神学校に入らずにそこに行きます。そこで埼玉県の独協大学の学園祭で、「神・罪・救い」の3本立てで伝道説教してくださいと言われたんです。いや、俺が聞きたいよ。もう、説教とは何か、説教準備とは何かわからないまま、まさにたたき上げの世界に投げ込まれたわけです。奉仕協会であった浦和自由福音教会の大きな教会で、夕拝など100人くらいいらっしやる。その月1回の説教が回ってくる。そこで初めて説教をしなくては行けない。もう、説教原稿書き上げて、説教はじまる直前、この原稿を読んでいたら、「おい、これは神の言葉だろうか」と思った。今から「神のことば」として聞く人たちがうしろにいる。「いやあ、やばい、やばい」と思った。「これはちょっと違う違う違う」と思った。変な汗が流れ始める。そして話始めると牧師が、「うん！？」と首をかしげる。

このころ必死で行ったことは、自分が教えられ恵まれた説教をテープおこして、原稿にまでおこすという作業をしました。いったい自分は恵まれたのは何なんだろう。そしてその牧師に、これを独協大学でやっていいですかと聞いて、やったら全然恵まれない。ああ、自分の言葉になっていないんだなあと思った。

すごく教えられ、恵まれて、メモしたメモを見たら、実は牧師が言っていなかったりする。それは何かと言うと、あの説教の間の中で、自分が示され、気づいたことを書いている。

私達は子ども達に語る事が精一杯で、語ることによって立ち上がってくる子ども達の応答が聞こえているだろうか。

このころの説教は、学生たちのリアリティに届く言葉だったなあと思います。何故なら私は20代前半で、そのころ私が教えられたことを、彼らにわかりやすい言葉で、彼らと同じ世代の言葉を私がおもっていたからです。恋愛の問題、親の問題、彼らの葛藤は、そのまま私の問題だったからです。そういうわけで届く言葉というのをもちやすかったのです。このころ作った説教というのは今でも現役です。特に中高生キャンプにもって行く。今はほっといたら40代半ばのおっさんの黙想しかできない。しかし20代のときにつくったあのリアルな20代の悩みから教えられた説教というのは、ほんとに今も届く言葉として持っているなと感じる。

・神学への渴き

しかし一方で、3年間KGKの主事をしましたけれども、そこで続々と変わっていく次世代が入ってきた。そして自分の持ち味とキャラと勢いだけでいけるのはあと数年しかないなと気づいた。そしてその時なさねばならないと思ったのは神学校で、変わっていく世代に変わることのない福音をちゃんと理解することだったのです。

・神学校を出てからの数年間の葛藤

そして聖書の学びに入った。神学校での学びは楽しかった。ああ、あのときこう語ればよかったのか。もう楽しくて仕方なかった。しかし、神学校を卒業して再びKGKの現場に戻ってきたとき、届いていないという現実には愕然とするのです。それは、私の言葉が、神学校の言葉になっていたのです。教会のみなさんは聞いてくださるんです。安心してきける言葉。しかし若者たち、中高生たちにはその言葉ではとどかない。

・どンドンとはなれていく自分のことば 若者に届く言葉を求めて

そのとき私が一生懸命したのは、あのKGKのスマールグループの分かち合いの中に入って行って、何が届いて、何が届いていないかを全部そこで教わって、そして戻ってきて説教原稿をもう一度書き直す。そして、次の県に行ってその説教をもう一度する。そしてもう一度磨く。その作業をひたすらやったんです。

ある教会は、毎年夏に呼んでくれる教会があったんです。だから毎年4本、新作のキャンプ説教をつくらなければならない。キャンプ説教というのはね、やっぱり違うんですよ。この4本の中で、どういことを語りかけていけばいいのか。

そういう届くための言葉を手にいれていく。そして自分の説教音源を必ずとって、必ず聞きなおす。みなさん、そんなことなさっていますか。私は時々、「大嶋先生は、賜物があるからいいですよ」と言われることがあるんです。それを聞くとね、悲しい気持ちになる。私は決して賜物があるタイプではない。私はひたすら努力してきた。こういう公演も、どうやったらみなさんが聞きやすい、速さにすればピッチがあうのかということの研究しながら、中高生に届いていく説教は何かということ。中には天才肌と言う人もいます。長島みたいな。どんとやったらばあつとくみたいな。むしろコツコツ王 貞治型というか。自分の説教を聞いていて、盛り上がってくると「ほんとうに」ということを連発しているということに気づき始めた。それがどんなに聞きづらい、わずらわしい響きをもつのか。そうやって自分の音源を聞き、子ども達に何が届き、何がとどいていないのかをさらされながら、そして教わりながら、変わっていく努力をやめない。

教会学校の先生の中に、「もう、私にはこういうやり方しかないもん」って。これ言っちゃいけない。まだまだ変わるんです。変わっていく努力が主への応答であり子ども達への愛なんだ。

②説教黙想のために 若者の世界を知ること

・彼らの「かわいい」「かっこいい」を共感しなくても、理解すること

彼らの心理描写を得るために努力は欠かせません。私は、彼らが「かわいいよね、かっこいいよね」と言うことは必ず調べることをしています。まったく共感できなくても、「それなになに」と必ずメモして、あとで調べています。特に中学生に届く言葉を手にいれるために、彼らが読む漫画は必ず読むようにしています。そこには彼ら世代に届く言葉が詰まっているんです。

KGKの先輩で、野球漫画「巨人の星」から、「タッチ」に変わった時、あそこで世代の変化が起きていると分析した人がいる。信じて祈ってなんぼだあという巨人の星世代から、そういう熱いのはダサいんだよね世代に移っていったときの語り方の違いというのがあるんじゃないかという研究をその人はしていましたけれども。

ワンピースとかジャンプの世界。愛、友情。ワンピースなんて結構どろくさいんですよ。結構、本当の友達が欲しいんだってみんな思っているのが、そこを見たらわかる。エースがね。とかいうと、なんだわかってんじゃん、みたいな。

幼稚科の話でもね、彼らが関心を持っているもの。トーマスとかね。いっぱいいるじゃないですか。その違いをね。「お、わかっているな」みたいなことを言ってくれるあの喜びと快感。そして「それがわかるんだったらお前の話をきいてやるよ」みたいな。そういう子ども達のもっているものをわかってもらうこと。

そして別に説教中にトーマスの話をしなくていいんですよ。彼らが何を楽しい、かっこいい、嬉しいと思っているかについて、分かってもらう教師と、別にそんなこと分からなくたっていいよという教師は、圧倒的な差がでるわけです。ああ、興味をもってくれているんだ。

・中高生たちが読んでいる言葉、表現、世界観を知る。

重松清の「きみの友達」という小説をご存知ですか。これは小学校女子の物語なんですけど、まあ小学校女子の心のこととか気持ちを言い当てるわけです。

浅井リョウなんてのもいいですよ。「桐島、部活やめるってよ」という本。中高生たちの事情について言い当てる。本当に見事だなと思います。

私達は説教をするときに、子ども達の心理状態を言い当てていく必要があるのです。その時に、例えばこういうことあるよねのたとえば、「例えば、就活でさ。クリスチャンって言えば落ちるとわかっていたらどうする」。うわあ、先生私のこと言った。そういう思いや感情の言葉を手に入れるため、自分でわいてこない言葉を手に入れていく、開いていくという作業をするわけです。

・中高生たちの生きている時代のリズム、テンション、間、スピード

スガシカオという歌手は、自分の歌詞はツイッターで次から次へと出てくる言葉を拾いにいくというんです。芸人のお笑いも重要なんです。

若者たちの中高生の話しているリズムとかピッチとか間は、ほぼほぼお笑い芸人の間なんです。

西川やすきよ漫才。あったじゃないですか。あのやすきよ漫才の時代、漫才というのはおじいさん、おばあさんのものだったんです。それを若者達にぐっともってきたのが「しんすけりゅうすけ」。それは何をしたかという、「やすきよまんざい」を全部文字おこしをして、倍速にしたんです。スピードをいきなり倍速にしたとき、若者世代がぐわあーと来たわけですね。その次、ダウンタウンがきた。ダウンタウンはスピードで勝負しないんです。発想で勝負するんです。ワンフレーズの言葉で、それが絵に浮かぶボケをいう。わかる、つまり映像化する言葉にしていくんです。つまりその言葉

をつかうとき、若者に話すとき、その絵が浮かんだ。

エマオ途上の絵が浮かんだ。横を歩いてくれているイエス様がまるで自分の横を歩いている、横に立ってくれているような絵が浮かんでいくような説教にしていく。

それは何がおこるのか。説教におけるリズムとスピード。私も日曜日の講談では、「みなさん、おはようございます。」ですよ。それが中高生キャンプになったら、「はい、どうもー」と出て行く。こんな牧師みたことない。だから聞いてみようと思うわけです。それは中高生だからやっているんです。私が教会で説教したら、「大嶋先生もちゃんと話せるんですね。俺を何だと思っているんだ。

若者世代に届いていく努力とかリズムとか、もしかしたらちょっと変えるだけで、彼らの顔がぐっと上がってくるといえることが起こってくるわけです。

・聴衆と説教者の分かち合いと説教内における対話

何より大切なのは、届く説教の一番の言葉は、みなさんのリアリティのある言葉。本当のことを言う。イエス様はエマオ途上でご自分のことについて語られた。

若者に届く説教とは、説教者自身が正直に語る。若い彼らが一番きらうのは置きに行った言葉です。これ言っとけば大丈夫といったような。

説教者自身が本当に教えられて、感動して、自分がこのみ言葉によってどんな力をもらったか。そしてそのことを正直にかたっていくのが、何よりも彼らに届くことばなんです。

説教準備をする中で、その言葉に感動しているかということがすごく大事です。自分と聖書の間、ちゃんとみ言葉による出会いがあるのか。いつの時代にも借り物の言葉ではとどかない。

大人は内容さえあれば、我慢して聞いてくれますよ。しかし子ども達は、偉い人とか関係ない。私に向かって本気かどうかです。安易な感動エピソードとか、よるある例話とかを引っ張ってくるよりも、「うちの教会のあの先生が、自分はこの一週間でしんどかったけど、このみ言葉を読んだときに、どんな励ましを受けたのか」ということの方が、教会の子ども達は、ああ、そうやってみ言葉って聞くんだったと思うんですね。マザーテレサの話ばかりしないほうがいいんです。会えないんだから。むしろ会っているこの人がどういう生き方をしているのか、み言葉との間でやっているかというその話をして欲しいのです。

うちの教会のCSはもう成長を使っていないんです。成長を発行している会社のセミナーでこんなことをいうのも何ですけど。じゃあ何をしているのかというと、4月は、CS教師達の証(あかし)月間。つまり、教師達がどうやって救われたかなんて中高生達は知らないんです。色々なクリスチャンになるなり方というのがあるんだと知ってもらおうとおもう。毎年やるんです。中一から高三まで6回聞いてもいいから聞け。そして、月に1回はレジェントウィークというのをやる。それは教会のレジェントゾーンの人たちを呼んできて、救いの証をしてもらう。あのおじいちゃんが、どうやって救われたか誰も知らない。本当にクリスチャンなのかみたいな。でも、おじいちゃんも喜んでくれるわけです。つまり教師の仕事は、教会の礼拝と彼らをつなげる仕事をしなくてははいけない。

ある時は牧師がエペソ書公開をしていたときは、「私にとってのエペソ書」というシリーズをやる。つまり、あの礼拝に出たときに、エペソ書ってどうやって聞くんのかということ教師達が話し始めるのです。そして5月、6月になったら、部活と教会、優先順位。夏前になったら恋愛、結婚、性です。

③説教者自身のみことばの体験 リアリティと共に

うちの教師の中でも70歳のご婦人がいらっしゃる。先生、私は恋愛の話だけはパスって言われちゃう。だめ、やってっという。

この先生の話は心のこもった本当にとどく説教をしてくれる。何故なら、つつみかくさず正直にかたるから。

④説教をいかにはじめ、どのように構成するか

- ・どのような説教をはじめるか
- ・修養会、キャンプでの説教の構成

⑤説教における「感情」

神学校を卒業したある時期、説教で感情や笑いをとりにくのは、微妙なのかなって思った時期がありました。関西は違うけど。おもしろかったと恵まれたのは同義語だからね。

私達の神は情熱をもった神。聖書の中でイエスが笑われたという記事はでてこない。じゃあイエスは笑わなかったのか。いや、いつもいつも笑ってらっしゃった。弟子達があえて書くこともなかった。そうであるならば、本当に楽しいお話をしていきたい。

4. 説教を聴ける若者たちへの神学的訓練 心が燃える経験として

①ひとではなく、神に

②「目がひらけ、イエスだとわかる」

「わかった」という体験

み言葉が届いたとき、目がひらける。今まで握りしめていたもの、部活がある。恋愛がある。会社がある。自分で握り締めていたもののせいで見えなかったそういったものから手をはなし、イエスだとわかった。ああ、イエスさまとであったという説教。

2人の弟子達は、一緒に話している人がイエスだとわかった瞬間、見えた瞬間、イエスの姿が見えなくなりました。でも、イエスの姿が見えなくても、彼らはイエスを本当の意味で見えるようになっていた。私達に必要なのは、聖書に届いていく、そういう話をしていかなければいけない。

さらに心が燃えた説教体験。やがて彼らは、心が燃えてどうなったか。彼らは共同体、すなわち教会に戻っていきました。

私達もね、教会につながっていく説教をしなければならない。彼らが教会を愛していくようなお話をしていかななくてはいけない。説教は個人化してはいけない。交わりの形成に向かっていくような。

③「聖書全体」神学的訓練によって「届く」広がりをもつけられる。

キャンプの説教なんかでもそうなんです。私がすごく大事にしていることは、このあと帰っていくいつもの日曜日の講壇につながるキャンプをやらなければいけない。キャンプは良かった。大嶋先生の説教は良かった。でもうちの牧師は…。それだったら、キャンプ講師としては失敗なんです。俺だって日曜日はちゃんとしゃべっている。特伝なんかもそうですけど。これハンバーグなんです。特別な日のハンバーグを教会が一生懸命みんなのために作ってくれているんです。でも、ずっとハンバーグ食っていたら体に悪いんだ。教会というのは家のご飯なんだ。家のご飯には、あんた嫌いでもピーマンださなきやいけない日もあるんです。小骨が多くても、カルシウムとらなきやいけない日もあるんです。そして一番いいのは家のご飯で、わざわざこのハンバーグは、たまにはいいよね、でも家のご飯を食べていけるあごを鍛えていける神学的訓練というのも彼らにもたらさなきやいけないんです。

④教会共同体 共同体の中で行われるわざとしての訓練

最後に

やがて彼らが教会にもどっていき、奉仕者となっていく。教会学校の教師となっていく。み言葉をわかちあう。そういう子どもたちを育てていきたい。「この話をあの子にも聞いて欲しい」とつながるまでの説教を目指したい。誘ってきたくなるような教会学校の話をしていく。それは宣教と伝道の思いが沸いてくる経験なんです。そのような教会学校を目指したい。

以上